

---

# 雷火と白梅

オクト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雷火と白梅

### 【Nコード】

N6608K

### 【作者名】

オクト

### 【あらすじ】

時は大正。

人々が新しい世の到来に胸を躍らせていた時代。

しかし、その時代にあっても天神の力を有する家系

鳴神家は、

人知れず影の世にてその命脈を生き続かせていた。

現鳴神家の当主幻九郎の息子にして、総領である総士郎はある日、女中にして猫の物の怪である小梅と共に妖怪の大家の屋敷へと連れ去られてしまう。

見知らぬ一室で気が付き、困惑する二人の前に現れる和服の美女。

彼女は涙ながらに語る。

「どうか私共をお救い下さい」と。

この作品の28%は、猫耳尻尾付き黒髪おかつぱ割烹着少女萌えで構成されています。

## プロローグ 僕と愛猫

「……起きて下さいませ、総士郎様。……起きて下さいませ、総士郎様」

可憐だが地に根を張ってぴんと伸びている花のような、そんな耳に心地の良い声が夢現に聞こえる。

いや、確かに僕こと鳴神総士郎は、三時の情眠を貪っている最中だったのだ。先程食べたカステラのせいでお腹がくちくなり、床の間で眠っていたのである。

「……総士郎様、好い加減起きて下さいませ。お掃除の邪魔でございます。……もしや、わざと小梅を困らせようとしているのではありませんか？」

いや、そんなつもりは毛頭ない。……ないのだが、うたた寝を邪魔される程気分を害する事はない。その事は、昔の小梅ならば十分に分かりそうなもののだが……。

しかし、僕の閉じた瞼の向こうにいる筈の小梅に、それを理解している様子はなさそうだった。

「よう分かりました。……私も、大旦那様から屋敷の番をせよときつく申し付けをされている次第でございます。床の間付のお座敷は、お客様をお通しする大事な部屋。塵一つ落す訳にはまいりませぬ」

そう言つと小梅は、二つ折りにした座布団を枕にして仰向けに寝ている僕の背中と膝の裏に両の手を差し入れると、えいや、とばかりに抱き上げたのである。

流石に堪らず眼を開ける僕。

白い割烹着にその身を包んだおかつぱで黒髪の十代半ば程の娘が、僕の目に飛び込んでくる。

眉毛の上で真っ直ぐに切り揃えられた前髪と、大きな眼の中の幾分縦に長い瞳。小さな鼻、花の蕾のような口許。顔の各所は小作りだが、なかなか可愛らしい顔立ちをしている。だが、何よりも彼女

を特徴付けているものがある。

小梅の頭の、頭頂部から指一本分を空けて左右に二つ、縁は白く内側に向かつて薄桃色をしている正三角形が、ぴんと立っている。

それはどう見ても真正正銘の、猫科動物の『耳』であった。

小梅は、鳴神家に長年住み付いていた白猫が、死後恩義を感じて人の姿となつて現れた物の怪であつたのだ。

猫の物の怪である小梅は、童顔めいた容貌とあいまって普段は愛くるしい限りの存在なのだが、今の彼女の顔には全く愛嬌というものが欠如していた。

「……何でございますか？ 総士郎様」

「……いや、下ろして、くれないかな……」

今年で十九となる好青年ことこの僕が、若い上に猫の耳付き女中に抱き上げられているというのは、まあ、格好良くはない。

だが小梅は、

「今の総士郎様は、私の仕事の邪魔をする大きなごみにすぎません。このままお部屋まで運び上げますので、どうか私の肩にお掴まり下さい」

全く意に介していない様子でそう言うと、大の男一人を持ち上げているというのに、小柄細腕の小梅はまったく危うげない足取りで床の間を出て行った。流石物の怪、見かけによらず大した力持ちさんである。僕の方は、男の威厳などそつちのけで落されないように彼女の肩に掴まった。しかし、小梅の肩は華奢な上に元々が猫のせいか、見事なまでにつるりとしたなで肩である。そのためしつかり掴まらないとすぐにずり落ちてしまうのだ。

そうになると、自然と必要以上に小梅に密着しなければならなくて僕の顔の正面には小梅の横顔がある。

暫くじつと眺めていると、

「総士郎様。そんなに穴が開くほど見られては、小梅は困ります。足を踏み間違えて、転ぶ事になるかもしれませんが」

大きな瞳をきよろりと動かすと、そう言った。

それは甚だいかん。この体勢で廊下の床に落とされたら、衝撃と人体の神秘でお尻の割れ目が倍加してしまうかもしれない。

そんなわけで彼女の注文どおり、小梅の顔をなるべく見ないように下を向いたのだが、僕の視線の先では、小梅の割烹着のお尻のあたりから伸びている白くて長いものが一本、ぷらんぷらんと揺れていた。どう見てもそれは、猫のしっぽであった。

小梅には、猫の耳の他にも、歴然たる猫のしっぽがあるのだ。

僕はその毛の膨らみ具合や揺れ方の頻度から、小梅の機嫌を窺い知る事が出来る。少しの間観察したが、幸いな事に小梅はそれ程気を荒立ててはいなかった。はずであった。

「……総士郎様。鳴神家の御嫡男ともあるう方が、女の尻ばかり見ているというのはどういいう見ですか」

小梅の、鋭利な鎌の非難の矢が、僕の心臓に突き立った。

ここで本当はしっぽを見ていたのだと言っても、おそらく信用されないだろう。しかし、まさか小梅の尻を見ていたのだとも言えない。そう言ったが最後、生真面目過ぎる小梅にどんな目にあわされるか、想像するだにおそろしい。何しろ僕の父である幻九郎げんくろうが、どういふつもりか小梅以外の従者をみんな引き連れて帝都へと仕事に出て行ってしまい、実質鳴神家には僕と小梅の二人しかないのだから。

しかし、顔を見るなど言ったのは小梅である。そのため視線を泳がせた先にあつたのは小梅のしっぽであり、決して僕にやましい気持ちがあつたわけではない。それでも顔を見なくて尻を見てよという免罪符にはならないのだが。

結局、僕はそ知らぬふりを決め込んだ。

小梅は「総士郎様」と幾分きつい口調で言いかけたが、途中で口をつぐんだ。僕の自室に辿り着いたのである。

「部屋まで運ぶ」と言った手前、小梅は僕を降ろす気が全くないよ。うなのだが、彼女の両手は僕を抱き上げているために塞がっている。立ち往生する小梅の額に、どうしたものかと縦じわが一本刻まれ

ていた。

埒があかないと察した僕は、小梅に抱かれたまま片腕を伸ばして襖を開けた。小梅と視線が合うと、僕の手を借りた事が不服なのか、少し頬を膨らませている。いや、無理だろう。それとも、足で開けるつもりだったのか。

四畳半の僕の自室には既に、ちゃんと布団が敷かれていた。

「ここまでする事はないのに」

存外丁寧に彼女の腕から下ろされた僕は、振り向いて小梅に言う。僕の偽らぬ気持ちだ。

「……御休みになられるのでしたら、ご自分のお部屋でなさって下さいませ」

小梅は素っ気無く言うつと、部屋を出て行こうとする。

その時、僕は思わず口を開いていた。

「……今日の夕食は、秋刀魚さんまにしてくれないかな？ ちょっと、食べたくなつた」

瞬間、小梅のしっぽがぴん、と棒のようになった。更に、小梅の頭頂部の猫耳が、びくびくびくと忙しげに動き始める。

僕にそれを見られるのが余程恥かしいのか、頭に両の手をやって猫の耳を覆い隠してしまう。すると今度は、しっぽの方が喜び一杯にうねうねと揺れ始めた。慌ててしっぽを押さえようとすると、今度は耳がびくびくびく……。

これにはどうしようもないらしく、小梅は頭頂の猫の耳と腰のしっぽを同時に相手をするという珍技を披露しながら、僕の部屋の前から足早に去って行く。

僕は布団の上で胡座をかいて吐息を一つ漏らすと、今日の夕餉ゆうげの光景を想像した。

猫舌である小梅の皿には、おそらく秋刀魚の刺身が乗るだろう。対面に座る僕の前にはほこほこと湯気が立ち上る焼いた秋刀魚。

たまには小梅と二人きりで食事をするのも悪くないな、と僕は思い始めていた。

日が沈み、茜色の空が徐々に藍の色へと変わる頃、今日の夕飯と  
なった。

僕は炊き立ての白米が山をなしている茶碗を小梅から受け取ると、  
もう一方の手に持っている箸で、小皿に乗せられている沢庵を一切  
れ口に入れ、もそもそと御飯を掻き込んだ。

漬け加減が絶妙な沢庵の塩しょっぱさが米特有の素朴な甘味に溶けて、  
僕の食欲を増進する。瞬く間に、茶碗飯に盛られた米の山が半分にな  
った。

「もう少し、穏かに食べられませんの？」

卓袱台の対面に座る小梅が、白米の湯気の向こうで非難めいた顔  
をしている。

「まるで、誰かに追われているかのようです」

「……そうかな」

そう言つて、大根の味噌汁を一啜り。小梅はと見ると、僕の予想  
どおり、秋刀魚の刺身をやや不調法な手付きで食べている。流石に、  
頭から手掴みでかぶり、という訳には行かないらしい。

「何を、じろじろ見ていなさるんですか？」

顔は秋刀魚の白身に向けたまま、眼だけを動かして上目遣いで僕を  
見る。元々眼が大きいので、結構怖い。どうも彼女は僕に対してだ  
け、女中であるという自分の身を失念するようだ。まるで、不出来  
の弟についつい世話を焼いてしまう姉のように。

「手がお留守ですよ。総士郎様が所望なさったのですから、身が熱  
い内にお早めにお食べ下さいませ」

「……はいはい」

半ば零すように答えた僕は、熱々の秋刀魚に箸の先をぶすり、と  
突き刺す。

秋刀魚には良く火が通っていて、少し焦げ目の付いたぱりぱりの  
皮を裂いた途端、内側から煙るような湯気と共に、秋の到来を嬉し  
くさせる香気が立ち上った。

僕は四角皿の角に盛られた大根おろしの小山を箸で一滴みすると、秋刀魚の上に乗せてその上に醤油を垂らして行く。

芳しい香りはさらに濃密さを増し、僕の鼻腔を攪る。日本人である事に感謝。

と、大根の酸味が鼻をついたのが、「くしゅん」と小梅が口許に手を当て横を向いてくしゃみをした。

「あ、ごめん」

思わず謝る僕に、小梅は目尻に浮いた涙を拭いながら「構いません、早くお食べになって下さい」と言った。

頷いた僕は、ほこほこの白身を口の中に運ぶ。

見た目に反さず、口許に溢れ出す秋刀魚の脂分は程よい熱さと相俟って、唾が湯水のように湧いてくる。もしかもしかと噛み締める度に秋刀魚の旨味が口内一杯に広がり、飲み下すのが勿体ないぐら이었다。

小梅の「早く食べる」という意味がよく分かった。これは確かに、焼き立てが一番美味しい。

御飯を掻き込んで、味噌汁と一緒に喉に流し込む。小梅が溜息をついたが、僕は一切構わなかった。

「……お味は、如何ですか？」

小梅が、もりもりと夕餉を口に運んでいる僕に訊ねてきた。見れば彼女は四角皿の角に箸をおいて、僕を見ている。その瞳に緊張と真剣な光を見て取った僕は、お茶を一口飲んだ後、

「とても美味しいよ。どうもありがとう」と応えた。

瞬間、小梅の猫の『耳』と『しっぽ』が、同時にぴくぴくうねうねしたが、

「それは、ようございました。……総士郎様のお茶碗、空のようですね。お代わりなさいますか？」

そう言ってきたので、僕は空になった茶碗を小梅に手渡した。

返って来た茶碗には、白米がこんもりと急勾配の山をなしていた。

## 黒衣の美少女

食後のお茶を楽しみながら、僕は頼杖をついて卓袱台の上に広げた新聞を読み耽っている。面白い続き物の時代小説が連載されているのだ。

「そんなに眼を近付けていると、悪くなりますよ」

食器を洗い終えた小梅が、目敏く注意の声を飛ばして来る。

急須のお茶を注ぎ足しながら、僕は「はいはい」と受け答える。途端に、

「はい、は一度だけで十分です。　そもそも、総士郎様には鳴神家の跡取りとしての自覚がおりなのですか？」

そう言つて僕の前でいきなり正座になると、両手を膝の上に置いて居住まいを正した。彼女の頭の上にある猫の耳は左右ともぴんと尖がつており、普段は持て余し気味のしつぽも一種の緊張感をはらんで直立している。

正直困つた事になった、と僕は思った。夕餉の様子から小梅の気分はそう悪くないと踏んでいたのだが、父さんも他の従者もない今を絶好の好機と感じたのだろう。

父さんはともかく、従者達は全般的に僕に甘い。

普段でしゃばる事を由としない小梅は、鳴神家の頭領にして絶対者である父や先輩格の従者達がいる手前では何も言わないが、内心僕に対して忸怩たるものがあると薄々は感じていた。

偶然小梅と二人きりになる度に小言めいた事を言われてきた僕は、勘と経験の双方で「これは長期戦になる」と悟つた。とにかく、最早新聞小説の豪胆な剣豪達に熱中している場合ではない。

僕は仕方なく正座になり、小梅に相對する。

小梅はこほんと咳払いした後、まるで教鞭を執る講師のように右手の人差し指を立てた。

「私も、あまりくどくどと申したくはございませんが、  
様、今年でお幾つになられたのです？」 総士郎

思わず自分の年齢を指折り数えそうになって、慌てて頭の中で暗算した。そんな子供っぽいまねをしようものなら、小梅に何を言われるか……。

「十、九です……」

素直にこたえつつ、次に来るであろう小梅のお説教に備える。

小梅は畳の目に視線を落として、長い溜息を一つ。

「昔の日ノ本では男子十五にして元服が当たり前だったのでございますよ。それを十を九つも過ぎた大の男が、それも鳴神家の総領ともあるうお方がですよ、日がな一日ごろごろとなさっていては、いい笑いでございます」

「あのね、小梅。今は、明治を過ぎて帝和ていわの世だよ。鬘むすに月代で腰には二本差しの時代じゃないんだ。それに」

その先の言葉を、きりきりと眦を吊り上げる小梅の顔を見てしまった僕は飲み込んだ。明らかに藪蛇だった。

「総士郎様！ 私が申したいのは、貴方様の気概のなさについてでございます！」

「きがい？」

鸚鵡返しに答える僕に、「左様でございます！」と小梅。ずい、と僕に顔を寄せてくる。

遂に始まったと、僕は心の中で吐息した。

熱弁を振るう小梅の顔が、僕のすぐ眼の前にある。

彼女は僕の日頃の行いを思い出すかのように眼を瞑り、人差し指をふりふり鳴神総士郎の精神構造を糾弾している。

対する僕だが、小梅の説教を殊勝に聞くには限界な程に、正座をした足の裏が痺れまくっていた。

お陰で気持ち全部足の裏に行ってしまう、小梅の説教に集中出来ない事甚だしい。そのため、小梅には悪いが彼女の型通りの精神

論はすっかり聞き慣れている僕は、その大半を聞き流していた。

そんな事露知らぬ体の小梅は説教を続けている訳だが、そんな彼女の真剣な顔が何だか可愛らしくなって、僕の胸の内に悪戯心が芽生えた。

僕には、時として衝動的に行動してしまう童心、端的に言えば悪童根性がこの年齢になってまで息づいているのだ。

僕はどうか正座のまま体を前に倒すと、首を伸ばして小梅の顔を間近にとらえる。

小梅は余程僕に言いたい事が募っていたのか、説教に身が入るあまり僕の顔と自分の顔とがマッチ一本分も隔てない距離にあるのに気付かない。

そして僕は、口唇の間から舌先を出すと、徐に小梅の鼻先をぺろりと舐め上げた。

「ひゃん！」

背中に雹の一欠けらを放り込まれたような悲鳴をあげ、小梅はそのまま後ろにひっくり返った。

僕が思わず笑いの吐息をもらすと、すぐさま起き上がった小梅は睨っていた両の眼を見開いて、驚きで一杯になった顔を両手の甲で擦り上げている。その所作はまさに猫だった。

「ななな、何を小梅になさったのですか！ 総士郎様！」

本当に驚愕した顔をしている小梅に向かって、何故だか妙に稚気が込み上げている僕は、再びぺろんと舌を覗かせて見せる。

小梅は僕に顔を舐められたという事を理解したのか、一瞬で顔を真っ赤にすると、

「そそそ、総士郎様！ 婦女子の顔を舐め上げるなんて、破廉恥極まりません！」

そう言つて、烈火の如く逆立ったしつぽを膨らませた。

だが、今日の僕はどういう訳か小梅への揶揄の矛を収めるつもりが毛頭沸いて来なかった。鳴神家の広い屋敷に今は小梅と僕しかない事が、心理作用に何らかの影響を与えているのだろうか。

「だけど小梅だって、昔は僕の顔を舐めた事があるじゃない。ざらざらしてたけど」

僕の口から滑り出た言葉を耳にした途端、小梅の顔がきよとんとなった。

それから、僕の言葉を理解したのか、怒りとは違う理由で顔を赤くした。

「そ、それはまだ私が、己の領分を知らずにした事で……」

俄かにそわそわし始めた小梅は、僕から視線を逸らすと言い訳めいた事を口の中でもごもごさせている。

小梅のお説教に対して珍しく形勢逆転出来た僕は、胸のすくような痛快さを感じながら、そっと我慢に我慢を重ねた足を崩す。

小梅は尚も「あ、あれは尊敬の印のような」とか「子どもの時分の事ですし」とかを口にしていて、僕が楽な恰好をしている事に気付かない。

僕は僕でにやにやしながら小梅の言い訳を聞いていたのだが、そのときいん、と澄んだ鐘の音のような音がした。

「これは、総士郎様」

「妖払いの結界が鳴ったね。誰か家に来たみたいだ。それも、狐狸の類じゃない。結構なお客さんだ」

鳴神家では、普段は妖払いの結界を張るような事はしない。

元々父が人間以外の方面にも顔が広く、それこそ数多の物の怪や妖魅、地方の土地神、水神、山神が時折我が家を訪れる事がある。その際、妖払いの結界によって門前払いして気分を害させたのでは、相手の格によつては後々面倒な事になるので、基本的に鳴神家は余程の事がない限り結界を張らず、どんな来客者に対しても門戸を開いている。

しかし、今回父自身が長期の外出という事で、鳴神家に居残るのが僕と小梅のみという事を配慮したのか、防衛の意味合いを込めて一定以上の格の者に反応するような結界が張られているのだ。

「誰だろうね。父さんに馴染みの方々には前もって不在だって事を

報せているから、遠方からのお客かな」

そう言つて僕は膝を起こす。

「わ、私が見て参ります」

緊張感を滲ませた小梅が、幾分声を裏返らせながら立ち上がろうとするが、それを僕は手で制する。

「一応、今は僕が鳴神家の頭領だからね。若輩者だけどそれなりの挨拶はしておかないと」

僕は若干の当て擦りも含めて両膝立ちの小梅にそう言つと、立ち上がつて一步を踏み出そうとする。が、内心僕も緊張していたらしく、まだ痺れの取れていない両の足をすっかり忘れていた。

そのため僕の脚は自分の体重を支える事が出来ず、ぐにやりと膝から崩れるように倒れてしまった。

前方、倒れ掛かる僕を、驚きのあまり丸く見開いた眼をした小梅の方に。

「うわわ！」

「総士郎様！」

小梅が咄嗟に両手を伸ばすが、倒れ掛かる勢いに乗つた僕の体重を支えるには彼女の体勢が悪かつた。

僕と小梅がもつれ合うように畳の上に転がる。

ずずつ、と左の頬が畳と擦れて焼けるような痛みを覚えるが、それ以上に身体の大半で感じた小梅の柔らかさが意外だった。

顔のすぐ近くには小梅の黒髪があつて、それが自分の顔が映るぐらいに艶やかで、そこから漂う匂いは、まさに名の通りに花の香のようだ。

そんな事をぼんやりと考えていた僕の右の肩口辺りから、

「そ、総士郎様！ 総士郎様！」

くぐもつた小梅の声が聞こえた。

「ん？ あれ？」

僕は畳の上に転がったまま、何かがおかしいことに気付く。

僕は小梅に向かって倒れた訳で、その僕は今、小梅の頭を自分の

右肩と腕、更に左腕を回してがっちりと抱えている訳で……。

「い、息が、総士郎様、こ、小梅、小梅の口を塞いでおいでです！」  
「ああ、ごめんごめん」

僕が少し身体を横にずらして腕の力を緩めると、酸欠のためか顔を真っ赤にした小梅が現われた。突然の事で、彼女も自慢の怪力を使えなかったのだろう。

「大丈夫？ 何だか僕、咄嗟に小梅の事を組み伏せちゃってたみたいだけど」

小梅は首筋に片手をやると、少し具合を確かめながら、  
「平気でございます。いきなりの事で驚きはしましたが、総士郎様が私の頭を庇って下さったお陰で他に怪我らしい怪我は」

そこまで小梅が口にした時、突然彼女の表情が固まった。そして、まるで何かに引っ張られるかのように、この部屋と廊下を隔てる障子に顔を向ける。

まさか、もう家の中に上がり込んだのかと思つた次の瞬間、何の音もなく障子の向こうに人影が映つた。

小梅が慌てて立ち上がるうとする暇も与えず、からりと軽快な音と共に障子が開かれると、そこには僕の、おそらく小梅も見知らぬ一人の少女が立っていた。

歳の頃は十七、八であろうか。

白磁のような肌の白さと、氷のような美貌が真っ先に眼を引いた。白い額に筆で刷いたような眉。切れ長の双眸。

つんと高い鼻梁に、無駄な肉のない頬。

唯一口唇の色素だけが薄かったが、それが逆に世俗離れた高貴な雰囲気せむたひを醸もたしていた。

また、彼女の肌の色とは対照的なまでに黒一色で統一された喪服のような洋装に驚いた。

上は黒のブラウス、下も同色のスカートで、両の脚の先を包んでいるのは、足袋ではなく艶めいた黒い絹のストッキングである。

と、どうして僕がハイカラな洋服について知っているかと言うと、

ちよつと小梅には見られたくない雑誌の中に出ていたからである。

襟元を飾るブローチまで黒い少女は、長い黒髪を微かに揺らして、僕と僕の腕の中にいる小梅を一瞥した後、

「失礼。火急の用で参ったのですが、御頭首は不在のようですね。それでなくば、若い殿方が物の怪の女中相手に情事に耽るなんて事はありませんから」

氷片が舞っているかのような冷たい口調でそう言うと、「どうぞ、お続けなさいませ」と、からりと障子を閉めようとする。

僕は呆気にとられながらも少女が口にした「ジョージ」の意味を図りかねていると、小梅が凄しい勢いで立ち上がり、閉めかけられた障子に手をかける。

「何ですか？」

閉めようとした障子で顔半分を隠した少女が無表情で問うた。一方、小梅の表情は分からないが、彼女の感情を反映してか、しつぽがぱんぱんに膨らんでいる。

「何が『何ですか？』ですか！ 大体貴女、無断で鳴神家の屋敷に上がり込むなんて、どういう神経をいらっしやるのかしら！」  
慇懃だが舌鋒鋭く小梅が言うと、

「だから、先程失礼と申した筈ですが？ それとも、その殿方との睦み事を見てしまった事も謝れば宜しいのですか？」  
冷え冷えとした顔と口調で少女が応える。

途端に、小梅の首の後ろが赤く染まるのが見えた。

「むむ、睦み事ですって！？ だ、誰がそんな！」

思わず口籠もってしまう小梅。

成る程。漸く僕も「ジョージ」の意味を理解した。まあ、見ようによってはそのように見えなくもないか。

と、そんな事を考えている場合じゃない。

小梅が我を忘れて、今度は両手をかけて障子を開けようとしているのだ。

どうも先程から一枚の障子を通して、少女と小梅の力のせめぎ合

いが行われているようだ。

小梅は、大の男の中でも長身の部類に入る僕を難なく担ぎ上げるぐらいの力持ちだが、その小梅と力比べをしても何ら顔色を変えないこの少女は相当のものである。

いや、今この家に張られている妖払いの結界を難なく潜り抜けている時点で、とんでもない格がこの少女にはある。

「ちよつとちよつと小梅、落ち付きなつて」

僕も立ち上がると、尚も障子に手を掛けたままの小梅の肩に手を置いた。手の平越しに、小梅の華奢な肩の感触が返ってくる。

すると、漸く我に帰った小梅が障子から手を離して、俯きがちに下がるに居間の隅で正座になった。

来客者として少女を迎えるつもりのようなのだが、当の少女が気分を害してなければよいのだけど。

少し面倒な事になったかなと思っていると、少女の瞳がこちらに向けられた。

蘇芳すわうというのか、黒味を帯びた深い赤の眼が僕を見据える。到底人では辿り着けぬ、闇と神秘が溶け合った眼をしている。何より凄まじい美人だ。目の前にしているだけで迫力がある。

僕は少女の直視に、背中に冷や汗が浮かぶのを覚えながら、咳払いを一つ。

「我が家の女中が起こした非礼の程、誠に申し訳ありません。

しかし、貴女様のご来訪の旨は存じ上げておりませぬ故、何卒ご寛恕下さいませ」

僕だつて、一応はこれくらい言える。大体、こつちだつて何も父さんから聞いていないのだから。

少女は尚も障子で顔を半分隠したままだったが、

「貴方様は、鳴神家の御頭首の御子息とお見受けしますが」

切れ長の瞳を少し上目遣いにして、少女は言った。

元々類稀な美人なのに、ちよつと媚びを含んだようなその顔は反則だ。

そのお陰で、自分の立場も忘れて、心が少しときめいた。  
しかし間髪を入れずに、

「総士郎様。鳴神家の総領としてのお役目、果たしなさいませ」  
小梅の言葉が、矢よりも早く僕の耳に飛んで来た。

思わず僕が後ろを振り返ると、小梅はふいと横を向いていた。

その横顔が、普段とは少し違う事に僕は気が付き、そして驚いた。  
小梅、涙ぐんでる。

僕が止めたとはいえ、障子を舞台にした力比べでむざむざ引き下がるしかなかった事がそんなに悔しかったのか。

ともあれ、柑橘類や酸味のある食べ物を嗅いだ時以外に初めて見る小梅の涙ぐむ顔に冷静さを取り戻した僕は、

「ええと、僕、いや、私は鳴神総士郎ですが、只今父幻九郎は所用で出かけておりました、留守を任されております。さて、貴女様は何用で当家に参られたのですか？」

一応それらしい事を口に出来た。

すると少女は、障子を開けて僕と真正面から対峙し、

「私の名はひもゆいまとい紐結纏。紐結の名、ご存知ありません？」

そう言う少女　紐結纏の周囲に、真冬の大気を彷彿とさせる冷気が降りたような気がした。

これが本来の彼女の姿なのだろう。

突如として恫喝めいた覇気を放つ彼女に反応して、妖払いの結界が騒然と鳴る。

至近距離で無数の鐘楼が鳴り響いているかのようで、鼓膜、いや五感そのものがどうにかなくなってしまいそうだ。

足場が急に泥に変わったかのような感覚に、僕は上体が崩れ落ちそうになるのを必死で堪える。だが、視界の四隅は既に暗く縁取られており、徐々に視野を狭めて行く。舌に軽い痺れを感じる。何かを掴もうと振るう腕が、まるで自分の物ではないかのように不確かで、腕を振り回す度に弾性を失った筋肉が無理やり引っ張られるような感触がやけに生々しかった。

そして、目の前が墨汁のような黒に塗り潰される一瞬前に小梅の声を聞いたような気がしたが、それも薄れ行く意識の中では急流に投じた小石のように、その存在を微塵もなく失っていった。

そう言えば僕は、一つ大切な事を忘れていた。

目の前にいる少女が、害悪をなす者かそうでないかを判じる手段が何もない事を。

## 和装の美女

覚醒は、暗い水面から無理やり引き上げられたかのような早急さで起こった。

がばりと上体を起こした僕は、周囲に視線を向けながら無意識の内に右手の人差し指と中指を真っ直ぐに伸ばし、手の平側に曲げた薬指と小指を親指の腹で押さえる『尖手』<sup>せんしゅ</sup>の構えを取っていた。活劇写真の中で忍者が術を唱える際の印にも似ている。

ぱりぱり、と空気が爆ぜるような音がして僕の指先に紫電が灯り、鼻腔を刺激する独特の臭気が起こる。

幼い頃から父さんに叩き込まれてきた荒事の対処法だ。

目が醒めたばかりなので輪郭がはっきりしない視界の中で、鳴神の家とは違う座敷に寝かされている事に気付く。

欄間<sup>らんま</sup>から差し込む日の光が部屋を明るく照らしており、ここが大体八畳程の広さだという事が分かった。

一面を壁、残り三面は襖に囲まれており、掃除の行き届いた青い畳や精緻に山岳の風景が描かれた襖、床の間の花瓶に活けられた桔梗の枝振りなどから、この部屋は客人をもてなすための部屋なのだろう。

実際、僕にはちゃんと掛け布団が掛けられていて、元々手荒に扱うつもりはないようだ。

気持ち少し落ちついた途端、部屋の隅の暗がりでは何か白い物がこんもりと形をなしているのが見えた。

眼を凝らしてじっと見ると、それは少しうつ伏せになるようにして横になっている小梅だった。

「こ、小梅！」

僕は『尖手』を解いて布団を撥ね上げると、小梅に駆け寄って彼女の顔の前に左手をかざした。

吐息が手の平に温もりを与える。僕と同じように眠らされている

だけみたいだ。

小梅も僕同様に無理やり連れて来られたのだろうか。それにしても着衣に乱れはない。

紐結纏と名乗った少女の事が思い出す。

彼女が自分の名を口にした時、途端に湧き起った気迫に僕は吞まれてしまった訳だけど、それぐらいで昏倒したというのは流石に変だ。僕の、男としての沽券にも関わる。

「ん、んん……」

彼女の口から意外に色っぽい声が零れる。意識が戻りつつあるみたいだ。

「小梅、小梅つてば。ほら、しっかりして」

小梅の肩に手を乗せて少し揺する。すると、うっすらとだが彼女の瞳が開いた。

眼が動き、黒目の勝った瞳が僕の顔に注がれる。

そして、黒真珠が艶光りするかのようになり、小梅の瞳に意思の輝きが灯った。

「……、そ、総士郎様！」

小梅がバネ仕掛けのように起き上がる。

僕は、心から安堵しながら、

「小梅も無事みたいだけど、怪我してない？」

そう訊ねると、膝立ちの小梅は身体の各所に両手をやって怪我がないか確かめた。

「い、一応は、怪我らしい怪我はなく……、そ、そんな事より総士郎様です！ 突然お倒れになるから、何処かお怪我をなさいませんでしたか？」

「うん？ 僕なら大丈夫だよ。それより、ここ何処だろうね。座敷に連れて来られた訳だから、ぞんざいに扱っつもりはなさそうだけど」

「あ、あの小娘！」

小梅は紐結纏の事を思い出したのか、ぎゅっと眉根を寄せて割烹

着の裾を掴んでいる。

「鳴神のお屋敷に無断で入っただけでなく、総士郎様に毒霧どくむを当てて連れ去るとは、絶対に許しません！」

「毒霧？ そんな物騒なものの僕に使ったの？ あの娘こ」

怒気交じりの小梅の言葉にあつた「毒霧」という単語に、僕は驚きと同時に妙な納得を覚える。そうか、あの時僕が倒れたのは彼女が使った毒霧のせいか。うんうん、毒を使われたんじゃ、どうしようもないよね。

「あの娘だなんて、そんな可愛げのある輩じゃございません！ あの小娘自身が『紐結』と名乗っていたではありませんか！ 紐結は、毒を持つ妖魅の中でも大家中の大家で知られる蛇の毒妖どくようでございますよ！」

流石物の怪。妖魅に関しては僕以上に詳しい。

確かに紐結纏むすぶが持つ美しさは、毒性を帯びてこそ到達する美の極致のような気がする。よく、猛毒の生物は派手な色彩である事が多いが、紐結纏の美しさもそれに類似するのではないか。

「蛇の毒妖のお嬢さん……が、一体僕に何の用なのかな」

そこが分からない。拉致された身だが今の待遇を考えると、特別鳴神家に恨みがある訳ではなさそうだ。しかし、父さんに用があつたのならば、後日改めてくれればいいだけの事なのに、その息子である僕や小梅まで無理に攫さらったのがおかしい。

と、僕はあまり賢くはない頭で考え事をしていたのだが、

「総士郎様、何をのんびりなさっているのですか！ 事は重大な拉致監禁でございますよ！ 一刻も早く大旦那様に御知らせし、報復の手立を打っていただきましょう」

小梅が口から火を吐きかねない勢いで言い募った。そんなに緊張感のない顔をしていたのか、僕は。

うーん、と腕組みをした僕は、

「取り敢えず、少し落ち付こうよ小梅」

と、言った。とにかく一晩経ってしまつたようだし、父さんが家

に戻つて来るにはまだ日数がある。下手に動くと藪を突ついで蛇を出す事にもなりかねない……て、もうご大層な美人の蛇に絡まれた訳だけだ。

しかし、小梅は眼を三角にする。

「これが落ち付いてなどいられますか！ 紐結だろうと何だろうと、明らかに鳴神家への敵対行為です。私は絶対にあの者を」

これはまずいと思つた僕は、小梅の顔をじつと見詰めて口を開く。

「ねえ小梅。小梅が無事でいてくれて、どんなに僕がほつとしたと思う？」

「え？」

突然自分の事を言われ、戸惑う小梅。

「もし、この場に小梅がいてくれなかつたら、僕もこんなに落ち付いてはいられなかつたと思う。一人取り残された小梅がどういう目に合わせられたのか、僕に知る術はないからね。それに、小梅の身にもしもの事があつたのなら、僕は絶対に彼女を許さない」

「そ、総士郎様……」

「だから、小梅がこうやって僕と一緒にいてくれたのが、僕はとても嬉しいんだ」

「も、勿体のうございます」

小梅が顔を俯かせる。が、ぱたぱたぱた……と忙しく振られていゝるしつぽを見れば、彼女の気持ちは一目瞭然だ。ふう、どうやら収まってくれたみたいだ。

「まずは相手が僕達に何を望んでいるのか、それを知る事からだ」

「流石は鳴神家の血筋のお方。泰然としていらつしやるのですね」

突如女の声が聞こえたと思つと、襖が開いてしつとりとした雰囲気の着物の女性が、廊下に正座をして現われた。

「何奴！」

「ま、待てつたら小梅。あ、貴女は？」

今にも飛び掛らんばかりの小梅を片方の手で制止ながら問うた僕に、女性は床に両手をつき、深々と頭を下げる。

襖の向こうは廊下を挟んで美しい日本庭園が広がっており、樹木の緑と暖かい陽光を背景に着物姿の女性が端然と平伏している姿は、まるで一枚の絵のようであった。結い上げて後頭部でまとめている黒髪に差してある赤漆の簪が、目に染みる程に合っている。

「此度の件、誠に申し訳なく思っております。私の名は雲原梢<sup>くもはらこうすえ</sup>。貴方様の御屋敷に現われました紐結纏は、私の旧き友にてございます」「それじゃ、僕に用があるのは君の方なの？」

雲原梢と名乗った女性に、僕は再度問うた。「はい」と顔を上げて答える梢。

歳の頃は十八、九か。僕と然程歳は離れていない。藍の濃い久留<sup>くるとる</sup>米がすりに赤い博多帯<sup>はかたおび</sup>を締めていて、襟元から覗いている半襟が白く眩しい。

もつとも、蛇の毒妖である紐結纏を旧き友と呼ぶ彼女だ。人間ではなく妖魅に類する者と見た方が良さそうだ。

しかし、雲原梢も整った綺麗な顔をしている。紐結纏も相当の美貌の持ち主だったが、この女性にはそれとは異なる美しさがあった。

目鼻立ちは特に華やかなようなところはないのだが、顔を構成する各部が全く均等なのだ。

大きく垂れ目がちの双眸と、低いが形の良い鼻筋。ふっくらとした赤い口唇。それに、着物の上からでも分かる程に肉感的な体付き。

「総士郎様、何を鼻の下を伸ばしているのです？」

小梅がそんな事を言うものだから、思わず僕は顔の下半分を手で押さえてしまった。

その様子を目の当たりにした梢は、一瞬目を丸くした後、着物の袖口を口許にやって上品に笑った。

邪気のない少女のような笑顔に、僕も心の構えを幾らか落とす。

「……それじゃ、えと雲原さん、まずここが何処なのか教えて欲しいんだけど」

僕がそう訊ねると、梢は目を伏せて、

「申し訳ありませんが、この地をお教えする事は出来ないのでございます。どうか、お許し下さいませ」

すまなそうにそう応えた。

内心そうなるだろうなと思っていたが、小梅がいきり立つのが心配で分かったので、

「成る程。誘拐犯が攫った被害者に居場所を教える場合、殺してしまふ気があるのだと聞いた事があるから、少なくとも雲原さん達にはそんなつもりは無い訳だね」

僕は小梅にも言い聞かせるように口にした。

すると、小梅も分かってくれたようで、考え直したように身動きする。

目の前の梢は無言だ。僕は言葉を続ける。

「……それじゃ、どうして僕達がここに連れて来られたのか、その訳を教えてくれないかな」

すると、厚い雲が日の光を遮ったかのように、梢の顔に陰が降りた。

「はい。もう察しておられると思いますが、私達がお呼びしたかった方は、貴方様の御父上であられる幻九郎様でございます。ですが、生憎不在との事。本来ならば前もって鳴神家へ伺う旨の文を送るべきでありましたが……何分、急を用する事にございましたので」

「回りくどい言い方は止めて下さいまし。たとえ貴女方が妖魅の大家であろうと、今回の件が通らぬ道理である事は承知のはず。ならば、言葉を弄するのではなく真意を詳らかにする事が筋でありましょう」

小梅が険のある口調で梢に詰問した。

正論だが流石にこれは言い過ぎだったので、僕は小梅に注意の眼を向けようとした時、

「まさしくその通りでございます。ですが、どうか私共をお救い下さい」

梢が再度床に両手をつき、深く頭を下げる。

僕は鴨居の辺りを見上げて腕組みをすると、むむむ、と唸った。

状況が状況だが、人の身であるうとなかろうと麗しの女性にここまでされたら、一応は日本男児の端くれである僕でも引き下がる訳にはいかないんじゃないのか。

逡巡の時間を数瞬の間に費やした後、僕が承諾の旨を口にしようとした時、右腕をぐいと引かれた。振り返ると、小梅が剣呑な眼をして右の袖口を掴んでおり、そつと身を乗り出して僕の耳許に囁いた。

「お待ちを。安易に了承し、生き胆を差し出せと言われたらどうするのです。それにこの地を教えないから身の安全は保障するという理屈も、私達の早合点かもしれませんよ」

生き胆はないだろ、とも思ったが、小梅の意見も確かにそうだ。

誘拐犯が居場所を教えないのは攫った者を殺さないからだという理論は、結局は誘拐犯側の理論でしかなく、僕は希望的な憶測を口にした過ぎない。

紐結纏の強引さや眼前の梢を見る限り、彼女達が相当切羽詰った状況である事は分かる。徳を積んだ高齢のお坊さんの生き胆は、妖魅にとってこの上ない食べ物だと聞いた事がある。生まれて二十にも満たない徳も積んでるのか崩してるのか分からない僕でも、身体には鳴神の血が流れている訳で、熟成が足りないけどそこそこ美味しいのかもしれない。

と、そんな事を考えていたら急に怖くなった。安請け合いは禁物だ。

「……雲原さん達が、鳴神の人間を必要としているのは分かりました。ですが、どういった理由でそうなるのか、本当の事を教えてもらえませんか？」

すると、梢は面を上げて、涙に潤む眼差しで暫く僕の顔を見詰めた後、

「私の、……婚約者の病を治していただきたいのでございます」

そう言った。

「こんやくしゃ？」

ああ、婚約者ね。そうすると、目の前の雲原梢さんはもうすぐ結婚する訳か。へえ、妖魅も結婚するんだ。まあ、こんなに美人な女の人だし、そりゃ結婚ぐらいするよね。

僕がみよーな納得をしていると、

「残念でございましたわね、総士郎様」

こんな状況なのに、含み笑いさえ聞こえてきそうな小梅の声が耳に届いた。

何がだ小梅！？

思わず口にしそうになった言葉を無理やり飲み込む。

「と、ともかく、雲原さんの婚約者の方を診て見ない事には」

「左様ですね。すみません、少し失礼します」

梢は着物の胸の所に手を差し入れて懐紙を取り出すと、恥ずかしそうに横を向きながら目許の涙を拭った。

そんな仕草が大変艶っぽいのだが、彼女には旦那さんがいる。

何だ、この複雑な心境は。

「……お疲れが残っているかもしれませんが、この時間に診て頂く事は叶いますでしょうか？」

女の人の潤みを残した瞳で見詰められると、嫌とは言えないのが男である。

「分かりました。父程に鳴神流に長けている身ではありませんが、出来る限りの事はいたしましょう」

僕がそう言うと、再び梢の瞳からぼろぼろと涙が零れ出た。

梢は玉のような涙を懐紙で拭う事も忘れて、

「……有難うございます。この御恩、生涯忘れません」

三度、平伏した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6608k/>

---

雷火と白梅

2010年10月8日12時52分発行